

たまごの

第156号

令和8年3月1日発行

発行所／一般社団法人
長崎大学玉園同窓会
〒850-0029
長崎市八百屋町36番地
TEL 095-824-5494

発行人／安部 和隆
印刷／株式会社 岩永印刷所

巻頭言 ～手探りで模索しながらここまで来て…～

長崎県教育委員会委員 郷野 和代



県の教育委員を拝命し、1年数か月経ちました。力不足を実感しながらも、悪戦苦闘している日々です。

今回、「今まで取り組んできたこと」というテーマを頂戴し、教諭時代にこだわっていたことを二つ紹介させていただきます。

- ① 始業式までに子どもの名前を覚えること
- ② 昼休みの遊びは、多数決ではなく、一人一人の「好きな遊び」で順番に遊ぶこと

若い頃は、「女の先生はハズレ」と思われている空気を感じていました。それだけに負けたくないという意地があったのかもしれませんが。

大規模校の始業式後のクラス編成時に、42人の子どもの名前を名簿なしに読み上げ、帰りには「○○さん、また明日ね。」と声をかけました。

保護者や子どもたちとの信頼関係を築くのに必死だった、当時の自分を懐かしく思い出します。

校長になってからも「1学期間待って」と宣言したものの、500名を超す子どもの名前を覚えるのは、加齢も手伝って困難を極めました。

「好きな遊び」で遊ぶことは、児童養護施設の職員向けに話された、精神科医の言葉にヒントを得て始めました。それは、「子どもを平等に扱っても満たされない。誰もが自分だけを可愛がってほしいと思っている。だから個別の時間を作ってほしい。」という内容のお話でした。

そこで、自分のクラスの子どもにもそれぞれ特別な日があったもいいのではないかと思い、その子が好きな遊びで全員が遊ぶ「わがまま遊び」の日を週に3日ほど設定することにしました。

そうすると、定番のボール遊びの他に、かくれんぼやままごとにお笑い、昼寝、お絵描きなどいろいろな遊びが出てきました。もちろん、「自由に過ごしたい」という選択肢も有りです。

これを実施するようになって、「自分の願いを叶えてもらうためには、自分も他の人のわがままを聞かなくてはいけない」という意識が育ち、自分勝手な行動をする子が激減したように思います。

また、在職中は5年間、県のこども未来課で家庭教育や子育て支援の担当をさせていただく機会がありました。

この時に「価値観の尊重」という学びを得ました。これは、親支援プログラムの理念の一つで、それまで価値観を押し付けていた自分の姿を反省し、人の話に耳を傾ける契機になったと思います。

退職後はこども園や子育て支援センターで、子育て中の親や年長児の小学校接続に関わる担当をさせていただき、もうすぐ5年になります。県庁時代に学んだことが仕事にも孫育てにも役に立っています。

昨年は保育士の資格も取得しました。私をここまで導いてくださったたくさんのご縁に感謝しながら、もうしばらくは社会に恩返しできたらと思っています。

目次

| | | |
|--------|--------------|------------------------|
| P 1 | 【巻頭言】 | 郷野 和代 |
| P 2, 3 | 【実践報告】 | 森 樹実人、立木 英邦 |
| P 4, 5 | 【現職教員の声】 | 堤 祐子、川口 高功、北野 奏介、原 優梨亜 |
| P 6 | 【県外からこんにちは！】 | 田中 佳幸 |
| P 6 | 【私も頑張っています！】 | 浦川 謙治、中小路 和久 |
| P 7 | 【母校だより】 | 藤本 登 |
| P 8 | 【事務局だより】 | |



実践報告

～「志」「郷土」「誇り」～

森 樹実人 (S63年卒・三井楽中学校校長)

1 はじめに

昭和63年3月に卒業し、あっという間に38年が経過しようとしています。現在は、五島市立三井楽中学校で校長として勤務し、校長としての勤務も残り1か月弱となりました。同窓の皆様にも、今後を担う方々にも何も残すものもできていませんが、校長として学校経営にどのような思いを持って取り組んできたかを紹介させていただきます。

2 学校経営の基盤にキャリア教育

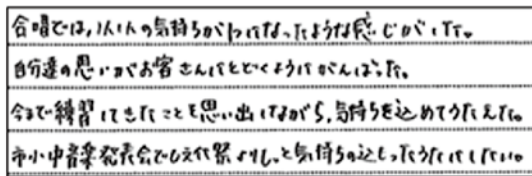
校長として最初に勤務したのが、五島市立奈留小中学校でした。奈留高校と小中高一貫教育の推進・実践に取り組み、その基盤となっていたのがキャリア教育です。基礎的・汎用的能力などを中心とした「人づくり」に取り組みました。私自身も勉強をしましたが、3年間取り組んだ中で、私自身はキャリア教育を「志」という言葉に収束させました。「志」とは「どこで生活しても、どこで働いても、社会に貢献し、自分の生き方に誇りを持つことができる」と勝手に定義しています。その後、奥浦中学校、三井楽中学校では一層意識をし、学校経営に取り組みました。

3 学校教育目標に込めた思い

学校経営＝子どもたちへの思いを「志を持ち 郷土を誇りに思い 郷土の誇りとなる生徒の育成」と、学校教育目標に掲げてきました。「志」「郷土」「誇り」をキーワードとしています。職員には、「子どもたちが卒業するとき『この地域で育って良かった。この学校で皆と学んで良かった。先生方と出会えて良かった。』と思えるように頑張ってください。」と年度当初から同じことを繰り返して伝えています。また、学校運営協議会(CS)だけでなく、地域の会議等があるときには、教育目標を伝え共有し、一緒に子どもたちを育てていく意識を持っていただいています。

4 郷土学習は「志」「誇り」の手立て

(1) 地域とのつながり



郷土の「人・もの・こと」から学び、郷土を元気にできる、それが誇りとなるように取り組んでいます。上は文化祭におけるある生徒の合唱の感想です。地域行事参加や奉仕活動等も実施していますが、総合的な学習の時間における地域学習も含め、生徒が「志」を持てるよう、教育活動を通して育んでいます。また、学校行事には多くの保護者や地域の方々に来ていただき、子どもたちの姿を見ていただいています。子どもたちへの励ましのメッセージや称賛の声を直接届けていただくことで、郷土の誇りとなっていることを実感させています。郷土への誇り(思い)が地域の誇りとなっていると感じます。

(2) 食育を通して

現勤校(三井楽中)では、平成29～令和元年度に、食育の研究をしていました。現在も研究の一部を引き継いでいます。その中に「G究グルメコンテスト」という取組があり、郷土の食材を生かしたいいくつかの献立を生徒が考え、文化祭の時に、来場者の方々に投票していただいています。1位となった献立は、給食の献立として出されています。



「〇班に投票してください。」と献立を考えた生徒たちは、教職員のみならず、保護者や地域の方にも声をかけます。選ぶ側も毎年悩みながら投票しています。他校にない、本校独自の取組は、地元食材を数多く使い、郷土の誇りを感じることができるようになっています。近隣に自衛隊の駐屯所があり、献立の参考にもしていただいたこともあります。

郷土を思い、自分たちがしたこと高い評価をいただいていくことを積み重ね、生徒の自己肯定感の高揚と、郷土に対する誇り、郷土から誇りに思われる生徒につなげています。

(3) 主体的な活動の推進

本校は、全校生徒38名の小規模校です。体育大会や文化祭、入学式、卒業式といった行事の準備は、全校でしなければなりません。

少ない人数であるからこそ、それぞれが気付き行動できるように仕組みでいます。準備は3年生が主導し、自分たちで会場設営等を行います。教職員は、ほとんど口を挟まず、補助的な役割です。以前は、教職員が主導し指導していましたが、生徒の主体性を育み、自ら気付き行動できるようにしています。少ないからこそできることではありますが、やがて、社会で活躍するようになった時、このような経験が生きていくことを期待しています。

5 おわりに

校長職を10年間務めさせていただきました。多くの同窓の方々と勤務する機会もありました。どこで勤務しても、同窓である方とは親近感を覚えます。私の教師としての考えや思いは、同窓の方を中心とする多くの方々との出会いによって育まれてきたと思います。

学校教育は、AIの活用など大きな転換期を迎えようとしています。しかし、教育の目的は「人づくり」です。人が人を育てることは大変難しいことですが、その分成長していく過程や、社会で活躍している姿を見ると、教師で良かったと心から思います。子どもたちに対する教師の思いを、AIは超えることができません。

同窓の皆様のご活躍とご多幸を祈念し、筆を置かせていただきます。

非認知能力 『可能性を引き出す3×3のチカラ』

立木 英邦 (H元年卒・佐世保中央高校校長)

平成元年度に採用されて37年目となりますが、ここまで様々な方々にお世話になり、ご指導いただき、支えていただきました。そういった方々に、心から感謝いたしております。今年度佐世保中央高校2年目を迎えていますが、本校での取組を中心に紹介させていただきます。

本校は、昭和52年4月に県内初の定時制・通信制独立校として開校しました。現在、夜間部、昼間部、通信制の3課程があり、平成30年度から夜間部に午後2時過ぎから授業が始まるエンカレッジコースが新設され現在に至っています。

本校は、従来から勤労青年のための教育を実践してきましたが、社会の変化に伴い、近年、多様な学習ニーズへの受け皿としての役割が求められるようになっていきます。今現在、本校には、学習時間や時期、方法など自分のペースで学べることから、自ら本校を選択した生徒や全日制の高校等になじめず不登校・中途退学を経験した生徒、家庭環境が十分に整っていない生徒等、多様な生徒が在籍しています。中学校までの学習が不十分な生徒への学び直しの機会の提供や、困難を抱える生徒の自立支援、特別な支援を必要とする生徒への対応などが重要な課題となっています。そのため、個々の生徒の状況に応じた学習活動・通級指導や日々の生徒指導、教育相談、特別支援教育、将来を見通した進路指導などの充実を図り、保護者や地域の期待に応えられるよう日々教育実践を進めています。

そういった中で、昨年度の6月に九州地区高等学校定時制通信制教育振興会研究協議会で非認知能力に係る研究発表があり、非認知能力に視点を当てた教育が本校の全ての生徒に当てはまると考えました。その後、8月に著名な講師を学校に招き職員研修を実施し、9月に非認知能力に係る新聞記事やベネッセ教育情報誌「VIEW next 高校版(8月号)」等を用いて、職員研修を実施しました。また、始業式や生徒集会時に、校長から非認知能力についての説明や非認知能力を意識した教育活動への取組の重要性についての説明を毎回行いました。

ここで、学んだ非認知能力について説明します。定期考査等の学力テストや資格試験で数値化された見える能力のことを認知能力というのに対して、自制心や好奇心、協調性、やり抜く力等の情緒や社会性に関する数値化されにくい見えない能力のことを非認知能力といいます。認知能力も大切ですが、それ以上に非認知能力が社会のいろいろなところで重要視されるようになっていきます。では、見えない能力、非認知能力をどのように捉えていけば良いかということになります。見えない能力を言語化することにより、人々は具体的な行動指標をもつことができ、その行動指標を習慣化して目標に近づいていこうという意識をもち行動できるようになると言われています。見えない能力、非認知能力を意識し自分の行動や考えを見える化、言語化していくことが重要だと考えられます。教育の場においては、教師が

生徒にこのような意識付けの支援を、協働して行っていくことが望まれています。

最終的に、昨年度の1月にベネッセ九州支社の講師を招いて職員研修を実施し、その中で東海大学付属大阪仰星高校の取組の紹介がありました。その取組は、十の非認知能力を掲げ行事等の様々な教育活動の中で生徒に意識させるというものでした。

それを参考にして、今年度から、本校の教育目標の中に盛り込まれている非認知能力を、次のように【可能性を引き出す3×3のチカラ】として示し、学校の様々な教育活動の中で生徒が意識して取り組む教育を始めました。

【校訓】：『誠実』『自律』『協力』

【可能性を引き出す3×3のチカラ】

『誠実』：「①自己肯定力」「②他者理解力」

「③情操・基礎体力」

『自律』：「④学びの継続力」「⑤自己管理能力」

「⑥貫徹力」

『協力』：「⑦コミュニケーション力」

「⑧協働力」「⑨貢献力」

「①自己肯定力」：ありのままの自分をかけがえない存在として認め、バランスよく受け入れる力

「②他者理解力」：自分とは異なる人の立場に立って考え、相手の感情や意図を理解する力

「③情操・基礎体力」：豊かな感受性を養い、健全な心身を作る力

「④学びの継続力」：基礎的な学習内容を学び直し、将来に向けて学び続ける力

「⑤自己管理能力」：ルールを守り、思考や感情、行動をコントロールし、目標達成に向け計画的に行動する力

「⑥貫徹力」：意思や方針、考え方などを貫き、最後までくじけずに続ける力

「⑦コミュニケーション力」：自分と他人の気持ちや意見を上手く伝えることで良好な人間関係を継続できる力

「⑧協働力」：個人の役割を理解し、チームとして責任感をもって行動する力

「⑨貢献力」：自分に何かできることはないかと考え、誰かのために役に立とうとする力

この取組の効果については、年度末に分析をする予定にしています。年度初めは、学校の秩序を乱す生徒の行動も見受けられましたが、年度の後半に入り、様々な行事や教育活動で生徒の懸命に頑張る姿も見られるようになり、落ち着いた学校生活を送るようになっていきます。



現職教員の声

学びのバトンを受け継ぐ

学びに集中する真剣な眼差し、校庭に弾ける子供たちの歓声。卒業後教育の現場に身を置いて、間もなく四十年の節目を迎えようとしています。今、私は管理職として最後の任地となる本校で、充実した日々を過ごしております。

先日、佐世保市教育センター主催の「教育フォーラム」に参加いたしました。佐世保市が心血を注ぐ若手研修「継続研修」「研究調査」の集大成となる発表の場です。そこで生き生きと輝く若手教員たちの姿を目の当たりにし、胸が熱くなりました。そこには、かつて私が受け取り、大切に育んできた「学びのバトン」が、確かに受け継がれていたからです。

思い起こせば、私という教師の土台を築いてくれたのも、この継続研修でした。当時私は、大学で社会科を選修していたこともあり、この継続研修でも社会科の授業研究に没頭しました。時間外には仲間や先輩と、研修から派生したサークルでも学びました。教材開発の面白さに取り憑かれ、新田開発や地域の産業等、地域教材も数多く自作しました。一人では決して成し得なかった挑戦の数々でしたが、成功も失敗も、今となっては全てが血肉となっています。

長い教職人生の中で、学びの形は変化していききました。やがて私は教わる側から、後輩の研修を支える兼

堤 祐子 (S62年卒・歌浦小学校校長)

任所員となり、職場でも研究の重責を担うようになりました。困難な局面で私を救ってくれたのは、研究を通して築いた仲間とのネットワークであり、一つのことを貫いて学んできたという自負でした。一つの教科を深く掘り下げる経験は、あらゆる教科指導に通じる普遍的な力を授けてくれました。

様々な事情で一度は途絶えたこの研修も、三年前、市の強い意志のもとで復活を遂げました。現在は「教育DX」や「省察」といった新たな息吹が加わり、私は「外国語」講座の責任校長として、若手と共に研究を進めています。フォーラムの会場を見渡せば、かつて共に汗を流した仲間が責任校長として並び、その前で、ICTを自在に操る若き後輩たちが堂々と発表していました。時代が変わっても、教師が自ら学ぶ喜びを感じる姿が変わりはありません。

教育の世界は奥深く、大きな使命感とやりがいを感じます。私たちが受け取ったバトンを、次世代がさらに輝かせて繋いでいく。若い世代の背中を押し、研究に没頭する楽しさを味わえるよう、これからも精一杯、教育の未来に貢献したいと決意を新たにしています。



これまでの日々を振り返って

同窓会報への寄稿の話をいただいたとき、少し迷いました。私は「特別なことはしていないし、今も目の前のことに取り組むことで精一杯だ」と思っていたからです。そう伝えたところ、「その、目の前のことに精一杯取り組んでこられたことで構いません」と言っていたので、寄稿することとしました。

これまでの私の教員生活を振り返ると、大きな成果や特別な実践よりも、日々の小さな積み重ねが自分の成長を支えてきたように思います。学級担任をしていたころは、子どもが安心して学校生活を送れるよう、友達関係を目を配ったり、教室の環境を整えたりしながら、いつも子どもたちのそばにいて心がかけていました。学級通信を作成する際は、家庭へ情報を伝えるだけでなく、子どもたち自身が認められ喜びを感じられることを大切にしました。授業では、子どもたちが「分かった」「できた」と実感できる瞬間を大事にしながら、教材や指導方法を工夫しました。保護者から、子どもの学力があがったことをうれしそうに話していただいたときには、これまでの関わりが子どもの成長につながっていたと感じ、励みになりました。こうした経験を通して、教員としての日々の仕事に、少しずつ自信を持って向き合えるようになったと感じています。

そして現在は、教頭として学校運営に携わっています。業務の幅は広がりましたが、日々の一つひとつの

川口 高功 (H11年卒・有家中学校教頭)

仕事にじっくり向き合い、できたことを小さな喜びとして楽しむ姿勢は変わりません。授業や学級経営で培った考え方は、今も判断や行動の支えになっています。

担任時代、学級で楽しく過ごす雰囲気子どもたちの安心につながったように、今は職員との関わりにおいても、つながりと和を大切にしながら日々の仕事に向き合っています。教頭としての仕事は目に見えにくい仕事もありますが、どれも丁寧に取り組むことで意味が生まれることを実感しています。そうした日々の業務の中でうまくいかないこともありますが、先を見据え、準備や工夫を重ねながら取り組むことで得た経験が、今の自分の支えとなっています。

改めてこれまでの経験を振り返ると、特別な実践をしたわけではなく、毎日の授業や教材、学級通信づくり、子どもや同僚との関わり——こうした目の前のことに全力で取り組んだ時間が、少しずつ自分自身を育ててきたと感じます。これからも、日々の学びや喜びを大切にしながら、子どもたちや職員と共によりよい学校づくりをめざし、さらに成長していきたいと思えます。



全ては子どもたちのために

北野 奏介 (R6年卒・桜町小学校教諭)

私が小学校の教員になって感じたことは、「なんてやりがいのある仕事だろう」ということです。無限の可能性を秘めている子どもたちが、これからの人生に向けて日々努力し、成長していく過程に最前線で立ち会えることができるなんて、この上なく幸せなことです。子どもたちの「初めての体験」や「わかった瞬間」など、その純粋な反応と笑顔にいつも元気をもらっています。まだまだ若輩者の私ですが、若手としてこれまで実践してきたことを2つ述べたいと思います。

1つ目は子どもたちの興味関心を引き付ける授業づくりです。1年目は毎日手一杯で、教科書通りの平凡で面白味のない作業のような授業ばかりしていました。そこで2年目からは各教科の授業において導入を工夫したり、現物を資料として用意したり、スライドなどのICTを活用したりするようにしました。例えば国語では文章を大きなまとまりに分け、グループの中でそれぞれ担当を決め、同じ担当同士で集まり内容を整理し、元のグループに戻り自分の担当を発表し合う「ジグソー学習」を行いました。また、児童の声も取り入れるようにしています。社会が苦手な児童にどうしたら社会の授業が楽しくなるか聞き、「クイズがあったら楽しい」という要望を受け毎授業の終わりに復習も兼ねたクイズ大会をするようにしました。これによりその児童は前向きな気持ちで社会の授業に参加でき、結果として成績を上げることができました。私は授業に正解はないと思います。これからも様々な手法でよりよい授業を目指して、日々改善に努めます。

2つ目は学級経営に力を注ぐことです。まだ2回しか学級担任をしていませんが、それでも「学級経営の

質が授業の質に直結すること」を肌で感じました。どんなに面白く魅力的な授業を考えても、普段の学級が安定していなければその授業は成功しないと思います。私が学級経営に当たり工夫したことは「指導の線引きを明確にすること」と「児童の自治的活動を推進すること」です。生活指導の基準が曖昧で、その都度言うことが違う教師を児童は信頼できるでしょうか。私は大きな指導の柱を示し、これに反する場合は厳しく指導すると明言し、実行してきました。これにより指導に一貫性が生まれ、児童も素直に反省して次に生かすことができます。自治的活動とは、例えば係活動を全て児童に委ねる、といった活動です。こうすることで児童は自分たちで決めたことに責任を持ち、お互いが抑止力として高め合うことができます。「自分のことは自分です」という自治の意識を高めることで、よりよい学級につながると考えます。

最後に、私は今、とても仕事が楽しいです。なぜなら「自分の得意なこと」を最大限生かしているからです。私は図工が得意なので、学年目標の4つの項目に合うキャラクターを作ったり、学年の図工の授業で使う資料や道具を準備したり、合同授業をしたりしています。また、昼休みには子どもたちと一緒に絵を描くときもあります。子どもの成長に携わり、自分の得意なことでも生かせる、この環境に感謝して、子どもたちに負けないように私自身も日々研鑽を積んでいきたいと思っています。



日々研究

原 優梨亜 (R6年卒・愛野中学校教諭)

教師になり、早くも2年が過ぎようとしています。私のこの2年間にタイトルをつけるならば、「日々研究」です。何事も初めての世界。私の強みである分析力を生かしながら、日々の学びを取り入れてたくさん挑戦し、たくさん失敗し、周りの方々に助けってもらって立ち上がり、また新たな挑戦をすることを繰り返してきました。子どもたちをたくさん混乱させてしまったこともありましたが、それでもついてきてくれた子どもたちには本当に感謝しています。日々研究して気付いたことが2つあります。

1つ目は、子どもたちとの信頼関係の築き方です。信頼関係を築くためには、生徒理解が全てだと思っていました。プロフィールを熟読したり、教育相談を丁寧に行ったりしてきましたが、思うように信頼関係を築くことができませんでした。そんなとき、同学年団の先生方の姿からたくさん刺激を受けました。形式的な生徒理解よりも、何気ない会話や共に過ごす時間の長さ、教師の表情や語りかける言葉などの方が大切だと気付くことができました。さらに、様々なカラーを持った先生方の姿から、他人と比べて焦るのではなく自分のカラーを出していけば良いと思うことができました。自分のカラーを探し求めながらではありませんが、焦らず自分らしく子どもたちと信頼関係を築いていきたいです。

2つ目は、授業づくりについてです。子どもたちが求めている授業は、わかりやすい授業だと思っていま

した。特に、思考を整理しやすいようなワークシートづくりに力を入れていました。研修で学んだことを取り入れつつ、自分で教材を分析し熟考してきました。わかりやすさに自信のある授業を展開しても、思うように子どもたちは反応してくれませんでした。場数を踏んでいくうちに気付いたことがあります。子どもたちが求めている授業は、わかりやすい授業よりも、エネルギッシュな授業かもしれないということです。非社交的な性格な私は、元気でテンポ感の良い授業展開や、冗談で場を盛り上げるような授業展開などは正直苦手です。しかし、理科への情熱や研究志向は負けていないと自負しています。自分の強みを生かした授業展開で子どもたちを引き込めるようになりたいです。

優しく包んでくださる本校の先生方、温かく受け入れてくださる保護者の方々、素直な心を持つ子どもたち、相談し合える同期の先生方。周りの方々に恵まれてここまでやってこられたことを、大変ありがたく思っております。そんな思いと同時に、2年間担任をさせていただいている子どもたちと共に過ごせる時間の終わりが近づいてきていることも実感してきました。残りの1年間、「私が子どもたちに残せることは何か」を第一に考えながら日々研究し続け、一日一日を大切に過ごしていきたいです。



県外から、こんにちは!

「不思議な縁」に支えられて

田中 佳幸 (H2年卒・久留米市立明星中学校校長)



長崎大学を卒業して、早いもので35年の月日が流れました。現在は久留米市立明星中学校の校長として、401名の子どもたちに囲まれ、充実した日々を過ごしております。私の教職の原点は、教育学部工業技術科にあります。4年間、少人数で本音で向き合い、昼夜を問わず様々なことを語り合ってきました。

そして、中学校技術科教師として教壇に立ち続けてきた歩みの中で、最近つくづく感じるのは、母校が結んでくれた「不思議な縁」の力強さです。現在、私が所属する市中学校教育研究会の技術科部会には、私を含め3名の同窓生が在籍しています。また、ソウル日本人学校に派遣された際にも、教育学部の同級生と再会しました。さらに、昨年まで在職した

市教育委員会のチームでも、職員7名のうち3名が長崎大学教育学部の出身でした。世代は違えど、同じ学び舎を仰いだ者同士、不思議と心を通わせるのに時間はかかりません。根底に流れる「教育への情熱と誠実さ」という共通の価値観があるからこそ、互いを信頼し、困難な業務にも取り組めたのだと深く感謝しています。

教育の根本は「人を人として大切にすること」にあると思います。同窓の絆が私を支えてくれたように、私もまた、子どもたちにとって温かな支えでありたいと願っています。これからも人とのつながりに感謝し、私のモットーである「愛と夢を育てる教育」の実現に向け、日々精進する所存です。

私も頑張っています!

親の遺言

浦川 謙治 (S55年小学校課程卒)



「頼まれたら断るな。誘われたら断るな」、これが親の遺言。

若い頃から「断らない」を旨として、「仕事」を頼まれたら後先考えずに引き受けた。上手くいかないことも多かったが、周りの皆さんの助力でどうにかやり遂げたように覚えている。

おかげで、退職後も声をかけていただき、不登校の子どもたちと交わることができたし、小学校・中学校・大学で働かせてもいただいた。また、時津町では、仕事と並行してコミュニティースクールや社会教育の委員もやらせていただいている。それらの中には新しい体験や発見がある。

また、「飲み会」に誘われたら、バッティングし

ない限り参加した。週に4・5回の時もあり、不摂生は体重増加や生活習慣病の源となった。

しかし、おかげで「飲み会」は退職後も続いていて、小学校からの先輩と、高校の同級生と、同年の元校長と等々それぞれ2・3ヶ月ごとの予定が入る。弱くなった酒を傾け、相好を崩して楽しんでいる今日この頃だ。

親の遺言と称し、続けて来た仕事と飲み会。今年は古希を迎えるが、いつまで「断らない」を続けていけるか楽しみだ。

〈追伸〉「断らない」を続けられるのは、家族のお陰です。感謝しています。

経験という大切なもの

中小路 和久 (S59年卒・橘中学校)



この5年間、諸所転々と、「子育て相談専門官」「教育専門指導員」「初任研拠点校指導教員」「教頭業務支援員」「県立大学非常勤講師」の職を務めました。おかげで、特別支援学級の生徒に国語の授業ができるという得難い経験もさせていただきました。そのなかで、学んだことが3つあります。1つ、いろいろな経験をするには、自分を見つめるチャンスになること、2つ、相手を徹底的に信じることで、相手が変わるきっかけになること、3つ、人間関係は万事につけて、こちらの意図や気持ちを、て

いねいに相手に伝えようとする努力が欠かせないということです。

3年ほど前から、「心の花」という短歌結社に所属しております。短歌は31文字で完結し、お金もかかりません。「小さなものに大きな生命を宿らしむることが、短歌の仕事である」といいます。これからは作歌を通じて、人やものやことを大事に生活をしていきたいと思えます。

母校だより

教育学部長 藤本 登

本学は、12月9日に音楽棟1階にある音楽ホール「長崎創楽堂」が長崎大学のネーミングライツ事業の一環として(株)十八親和銀行により「十八親和ホール・長崎創楽堂」として今後10年間にわたり活用されることを発表し、記念セレモニー・コンサートを開催しました。この音楽ホールは、平成23年の教育学部音楽棟の改修工事に合わせ、県内で不足していた小規模のコンサートホールを建設し、地域の芸術文化の振興に大学として寄与したいという思いから、音響工学の専門家である長崎総合科学大学の宮原和明名誉教授のご協力により、建設されました。そして市民に開かれた音楽ホールとしての活用に賛同された(株)十八親和銀行様からの支援を受け、スタインウェイ&サンズ社製のグランドピアノを整備し、国内外のアーティストを招聘した特別コンサート、学内の教員と地域のアーティストが連携した定期コンサート、長崎の子どもたちの感性を高める活動としてワークショップや演奏会支援、海外協定校や国際交流都市との連携によるコンサート(上海師範大学、昌原大学校、長崎市交流都市イタリア・アルッカ市、長崎県(プサン・上海))が行われてきました。これらの事業は、令和3年までの10年間で、大学の講義での使用を含め約1,300事業、延べ約55,000人の方に利用して頂き、学生の教育だけではなく地域の文化活動を支えてきました。令和4年に終了した芸術文化普及活動事業ですが、今年度から「アート・イン・ビジネス」という新たな視点である「経営者シリーズ」を加えた事業がスタートすることになりました。コンサートでは、第6回マダムバタフライ国際コンクール in 長崎で入賞しオーディエンス賞を受賞したソプラノ歌手今野沙知恵さんと、注目のピアニスト中村卓士さんが出演し、プッチーニ作曲『ジャンニスキッキ』より「私のお父さん」や、長崎出身の福山雅治さんの「クスノキ」など全7曲を披露し、観客を魅了しました。また美術技術教室棟1階玄関横にある「Art and Tech Exhibition Lab 爽創館」も、「十八親和ホール・長崎創楽堂」の活動に合わせて活動を活性化します。そしてこれを機に、教育学部では『長崎創楽堂芸術文化振興基金』を設立し、内外の関係者による協議



十八親和ホール・長崎創楽堂記念コンサート風景

会のもと、地域社会と一体となって持続的に芸術文化を支える取り組みを推進しますので、引き続き期待と支援をお願いします。

11月4日には「国立大学法人等改革基本方針」が伝えられ、附属学校の在り方の検証と規模等の見直しを学部と併せて行うことが求められました。大学には、学部・大学院改革も含めて大胆な提案が求められています。一方で、今年度進めた業務改善は、幼稚園で保育料の無償化の影響等で続いている定員割れの対応として次年度から預かり保育を始めます。また、中学校の部活動の地域展開を進めるために『一般社団法人長大附属未来創造アカデミー』の設立を年度末に行います。そして安定した財源確保を目指して『長崎大学教育学部附属学校園基金』を年度末に設立します。国も今年度から学校支援人材等を活用した附属学校機能強化事業として、スクールカウンセラーや支援員などの配置の予算化が行われたが、公立学校と同様に家庭や子どもが多様化する中で、子どもたちの学びの充実と教員の負担の軽減を図り、先導的実践研究や教育実習への対応を進めるために、さらなる機能強化を図るための工夫と手立てが必要です。引き続き皆さまのご支援をお願いいたします。

さて前号でも紹介しましたが、県内の教員採用選考試験受験者の確保が難しい中で、教職の魅力発信し、「長崎県の子どもたちが長崎県の教育を支えていく教師育成システムづくり」の一環として、高校生対象の教職セミナーを大学(8月4日:69名参加)と新上五島町(9月13日:43名)で開催しました。現職教員や教育学部生による教職の魅力や学生生活についての講話や、大学の授業・実習体験、教育学生と現職教員を交えたグループディスカッションが行われ、参加者に教職や大学での学びの魅力を伝えました。次年度からは長崎県教育委員会も同様の事業を始める予定で、県内5か所での開催を予定しています。お近くで開催の折には、是非、ご参加やご参観をお願いします。これに加え、例年通り、県立高校校長会と連携した高大連携の学部紹介や大学の講義の体験授業が20校で実施されました。今年度の教員就職率は、10月末時点で、学部が60.7%(前年度58.1%)、大学院で100%(前年度90.0%)で、年度明けに決定する臨採を考えると約70%になると予想されます。これも本同窓会のご支援の賜物であり、深謝致します。

最後に、本学のみならず地域の音楽教育や校歌の作曲に貢献された三上次郎教授が退官されることを報告します。



事務局だより

事業等の募集

本会は、公益目的事業として、長崎県内の小学校・中学校・高等学校・特別支援学校に対する図書購入の助成、及び長崎県内の児童・青少年育成を目的とする事業への助成を行っています。

【図書購入費助成事業】

1. 助成校：本県内、小・中・高・特支の各学校
2. 助成額：1校につき5万円未満（4件程度）
3. 募集期間：令和8年4月1日～6月30日
4. 応募手続き
 - ①助成希望学校は本会事務局へ連絡
 - ②希望校へ募集要項を送付
 - ③希望校は申込書及び購入図書計画書を提出
 - ④選考後、決定通知を送付

※応募先（本会事務局）

Email : inf@tamazono.net

Tel.&Fax. 095-824-5494

【児童・青少年健全育成助成事業】

1. 対象事業
 - ①児童及び青少年が参加して行う体験活動・発表会・展示会・伝統文化継承・社会貢献等の実践活動
 - ②健全育成を目的として実施する、保護者・地域の指導者等の研修、学習活動
2. 助成額：5万円を上限として、対象とする事業の必要経費の概ね1/2を限度
3. 募集期間：令和8年4月1日～6月30日
4. 応募手続き
 - ①助成希望団体（希望団体）は事務局へ連絡
 - ②希望団体へ、募集要項を送付
 - ③希望団体は、申込書及び実施計画書を提出
 - ④選考後、決定通知を送付

終身会員への変更について

ともに、終身会員として

令和6年度の定款改正により、現職、退職にかかわらず満60歳を迎える年度以降に終身会費を納入していただくと、終身会員へ変更いたします。ぜひ、終身会員として、本会の進展にご支援いただければと思っています。本会の全ての事業は会費収入により賄われています。

終身会員への変更、どうぞよろしく願いいたします。

登録は、ウェブで簡単にできます。



<https://forms.gle/VtB9zAxM5nXyF6hM9>



※終身会費5,000円（登録時1回のみ）
支払いは郵便払込でお願いします。
ウェブで登録された方には振込用紙を郵送いたします。

お知らせ

令和8年度は、本同窓会が発足して140周年となります。

140周年を記念して、令和8年度の総会終了後、昼食会（会費は自己負担）を計画しています。

たくさんの会員の皆様のご出席をお待ちしています。

※ご出席いただける方は、事務局までご一報ください。

令和8年度総会

日時：令和8年6月28日（日）10:30～

場所：長崎市立桜町小学校内「地域・学校交流センター」

玉園同窓会ホームページ

<https://tamazono.net/>

玉園同窓会

YouTubeチャンネル



事務局へのご連絡

- ・電子メール：inf@tamazono.net（常時）
- ・電話・fax：095-824-5494（以下の時間帯）
曜日：火曜日、金曜日
時間：10時～14時30分

※不定期にお休みすることがあります。

題字：青嶋秋男